

「疑う者を包み込むイエス様」(2022.2.20)

「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」(ヨハネ 20:27)

私たちは疑う。それは間違いたくないからである。信じて裏切られた人ほど、自分の経験を超えることには臆病になりやすい。そのため、残念ながら新たな世界は閉ざされてしまう。でも、イエス様は微笑み、その御手をもって導いてくださる。



復活を私たちは疑う。先日、疑うトマスに復活のイエス様が語られた上掲のみ言葉が思い出された。手を差し出し、指を当てて見よ、わき腹を見せ、手を入れて見よ、と言われたのである。

復活を疑う者へのこれ以上の説得があるだろうか。もし私がトマスの立場だったら、やはり同じように「わが主、わが神よ」とひれ伏したことと思う。世界中にイエス様の復活を疑う人はごまんという。その一人ひとりにトマスと同じように現れてくれたら・・・と思う事もある。でも、イエス様があっちこちと世界中の疑う人の処を訪ねる姿を想像すると、それは復活のイエス様を自分たちの願望の奴隷にすることではないか。そう感じた時、トマスへの顕現をもって私たち一人ひとりへの顕現と受け止める、それがイエス様の御心に違いない、と思われた。

また十字架の贖いを私たちは疑う。太宰の言葉を思い出す。「赦されてなんかいるものか！」自分を赦しの下に置くことを拒否し、一見、罪と死を引き受け、自己責任に生きる誠実な姿のよう



に見える。しかし、それは大きな誤解だ。なぜなら罪は本人が死んだからといって自分の記憶から消えることはないし、神の赦しを受け入れるまでは、恐れの間を生きることになるからだ。太宰を反面教師にして、私たちは十字架から語られる赦しのみ言葉を聞く者になりたい。「罪のすべてに倍する報いを主の手から受けた！」(イザヤ 40:2)「あなたがたに平和があるように」(ヨハネ 20:26)。十字架の下に平伏し、十字架の放つ光、

義の太陽の翼に身を委ね、浄められ、癒され、聖なるものに造り変えて頂きたい。

イエス様からのメッセージである。「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」